令和４年度　福生市立学校 学校評価書総括表

令和５年３月１日

	学校自己評価総括	改善策	学校関係者評価総括	改善策	総括評価
福生第三中学校	**学習・進路指導** ●「主体的、対話的で深い学び」の実現に向けた授業研究に組織的に取り組むことができた。３年生の１年次からの地道な学習への取り組みにより、英語「GTECスコア」が（380➡490➡539）年々上昇し、全国学力調査結果も国69/数53 /理50)と全国平均を上回った＜成果＞ ●自立に向けて、将来に対する意識を醸成する必要がある。自尊感情の向上により、自己決定・自己主張できる力の育成やキャリア教育をさらに充実させる必要がある。	●生徒授業アンケート【①「学ぶ楽しさを感じる授業」②「分かる授業」】の結果を検証・分析し、授業づくりに活かす必要がある。特に「楽しさ」を重要視し、学びに向かう力の向上を目指す。 ●教育活動全体を通して、生徒に自分が「価値ある存在・かけがえのない存在」であることを認識させ、自尊感情の向上から、系統性、計画性のあるキャリア教育に取り組む。	●昨年以上にICTを活用した授業が多く見られるなど、工夫が感じられた。 ●全体を通して、生徒は落ち着いて授業を受けている反面、「思考する」点で、受け身の生徒も見受けられた。家庭学習の習慣化が課題と聞いたが課題解決を期待したい。	**（１）学習・進路指導** ●ねらいや課題を意識し、導入や振り返りを重視した授業を行い、学びを日常生活と結び付けることで生徒の主体性や学びに向かう力の育成を図る。 ●生徒が主体的に問題解決できる力や情報活用能力を身に付けるために、一人１台端末の活用をさらに発展させる。 ●生徒理解に努め、自尊感情や自己肯定感の育成から、自信を付けさせる指導を軸に学びに向かう力の育成を前進させる。	**（1）学力向上と授業の工夫改善** 各教科及び領域における「見方・考え方」の内容を理解し、各教科及び領域が目指す資質・能力をバランスよく育成する必要がある。また、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、その評価材料や根拠を明確にする必要がある。個々の研鑽や組織としての研修を充実させていく必要がある。 校内研修を柱にOJTの活性化を図り、主幹、主任の責任をもった若手教員の育成に加え、教員同士が切磋琢磨して学び合う学校風土を大切にしていく。
	生活指導・特別支援教育 ●全ての教育活動の中で、生徒が他者から「認められ、感謝される体験」による自尊感情の育成に努めた。また、「安心安全で、認められ、楽しい体験ができる学校づくり」により、さらにいじめや不登校の未然防止につなげる。 ●特別支援教育を重視し、【誰一人取り残すことのない】教育を推し進めるため、校内支援委員会を機能させることに努め、年間を通して週１回の会の開催が確実に行えた。しかし、具合的な対応より情報交換の時間が長くなる傾向にあった。支援教室への１～３のレベル判定も毎回確実に行う必要がある。	●人権感覚に優れ、生徒の人権、人格を重んじ、愛情と情熱をもって職務を遂行できる教師を育成する。 ●認められるところは認め、称賛する等、一人一人の生徒の事象の背景や気持ちを理解し、生徒との信頼関係を土台とした指導を行う。 ●特別支援教育の充実のために、特別支援教育プログラム「アクション１０」を中心に校内研修を充実させる。また、教育センターや関係諸機関との連携を強化し、不登校及び学級不適応生徒の具体的な指導や支援につなげる。	●廊下ですれ違った生徒が元気よく挨拶をする。「校訓 礼節」を柱とした基本的な生活習慣の確立に取り組む様子が感じられた。その点では「七五三挨拶運動」もよい取り組み、挨拶を大切にする指導は、これからも続けて欲しい。	**（２）生活指導・特別支援教育** ●悩みを抱える生徒、不登校の生徒には、意識して寄り添い、その背景をよく理解する。また、カウンセリングの手法を取り入れた教職員の実践的な対応力の向上を図る。 ●生徒の小さな心のサインを見逃さず、いじめや変化等に教員が高い意識をもって組織的に取り組んでいく。 ●教員の丁寧な支援の下に、「自分も一人の人間として大切にされている」という　自己存在感を生徒に実感させ、自己肯定感や自己有用感を育むことを土台とし、生徒の自己指導能力を身に付けることに視点を置く。	**（2）自立に向け、自尊感情や自己肯定感を高め、自信・やる気を育む教育活動の推進** 日常の教育活動に加え「美校会」、あいさつ運動、落ち葉掃き清掃等のボランティア活動を学校生活の中に意図的に多く取り入れることで、自己有用感を高める。また、自分を他者との関わり合いを通して「かけがえのない存在、価値ある存在」としてとらえる気持ちを育て、自尊感情や自己肯定感の育成から個々の自信ややる気に発展させ、自己実現に向かわせる。
	学校運営 ●朝の企画会と運営委員会を学校運営の柱に、組織的な取り組みをより意識した学校運営に努めた。 ●２学期末において、生徒・保護者・教員三者での１７項目の設問内容をそろえた比較できる形でのアンケートを実施し、実態把握に努め、成果と課題がより明確になった。	●教職員相互の理解に努め、各自が自己のそれぞれの役割と責任を意識して学校経営に意欲的に参加する学校文化を醸成する。 ●生徒・保護者・教員アンケートの結果をホームページや学校便り等で公開し、地域や保護者の願いを学校運営に確実に反映していく。	●生徒の地域行事への参加も年々増加し三中生の明るさや健全な様子が伺える。 今後も家庭や地域との細やかな連携により、地域に開かれた学校運営を行ってくれることを期待する。そのための支援は惜しまない。	**（３）学校運営** ●評価は引き続き生徒・保護者・教員・学校関係者の四者を１７項目の同じ設問で行う。これら四者を比較・分析し、（独善的にならないよう）総合的な見方から、よりバランスのとれた評価を行い、成果と課題を明らかにしながら次年度の教育計画に活かす。	**（３）組織的な教員集団による学校運営** 日常において、教員同士がコミュニケーションを密にとり、相互理解に努め、子供のために前向きに努力できる雰囲気の中、緊密な連携の下に日々の教育活動に当たる。また、各自が自己の役割と責任を意識して学校経営に意欲的に参加する学校文化を醸成する。
	地域連携 ●コミュニティ・スクールとしての活動が３年目に入り、コロナ禍ではあったが、地域連携を旗印に「地域防災・安全指導」「地域の人材から学ぶ」「学校・地域美化活動」「挨拶運動等の健全育成」をより多く実施できた。 ボランティア精神の涵養や自己有用感の育成等生徒の内面的な成長をより確かなものにし、さらに地域に貢献する心を育て行く。	●今年度は、コロナ禍であったが、その影響を最小限に抑えられ、コミュニティ・スクールの活動を充実させることができた。しかし、実際の活動においては、昨年度と同様、地域支援スタッフの人員不足があった。地域にスタッフの募集を図り、より確かな活動へと発展させる。	●今年は、恒例の「四地区合同水・防災訓練」に加え１０月の避難所設営のための「総合防災訓練」、９月の「公園清掃」、１月の「新春福生ウォーキング」など、防災だけではなく、活動の種類増え、地域貢献の姿勢が見られた。	**（４）地域連携** ●今年は、昨年以上に地域での活動を充実させることができた。それらの活動を通して生徒たちは、多くの方から、「ありがとう」の言葉をもらい、自信が持てたり自己有用感の育成につながった。 さらに参加者を増やし、地域に貢献できる学校を目指す。	**（４）地域の中の学校** コミュニティ・スクールの活動を通して、家庭や地域と協力・協働した活動を多く取り入れる。 その活動の中で、多様な学習や体験及び地域の人材を有効活用したより豊かな学びを実現する。